

9月のことば

教え③ ～習慣、躰の意義

秋の始まり、急に日が短くなったような気がする。日記の備考欄は仏教的用語に囲まれるが、いずれも古人の教えが凝縮されている。

1、「挨拶」

赤ちゃんに毎日「おはよう」と挨拶していると、いつの間にか子どもから「おはよう」「おはようございます」と挨拶が返る。挨拶ができて心が開く。

2、「掃除」

おしめを取り替えることで清潔を好む心を育てる。紙おむつは不感症にならないよう配慮が必要。

掃除は素直な心を育てる。清潔への不感症は、贈収賄など汚い事を平気とする下地をつくる。教え、学びの基本はまず正しい姿勢をとる事で、その始めが掃除である。

3、「^{きまつかしようこ}脚下照顧」

禅寺でよく見かける立て札。座禅をする事よりも、まず履物をちゃんと脱ぐのが大切。“足元を振り返って見い”ということ。

日本の履物は、^{がんらい}元来左右の区別なく他人も履く事が前提。他人に対する思いやりを持って脱いでおく。人を観る時、履き物の脱ぎ方で家風が分かる。

4、「習慣」

“習”は、ヒナ鳥が親の飛ぶ姿を見て、何度も何度も羽ばたきの稽古をする形の文字。

“慣”は、ふらふらしないように心を立てて、立心偏“忄”にして貫く（玉に穴を開けて紐で通す）という意味。

繰り返し行なって、自然に何の抵抗も無く行なわれるようになること。

5、「^{しつけ}躰」

習慣化を表した日本発明の文字。人は苦より楽を選ぶ。そこで外から「そこを崩したらあかんぞ!」と言ってやる。服の仕付け糸は完成するまで必要だが、できたら要らなくなるように躰もできるようになると不要となる。

6、「勉強」

上記1～5ができてこそ、「強いて勉める」勉強が可能。（強制的に教えを受けても、我慢して体得できる能力。）

教え学びの意義は、己の明德（^{おのれ}長所）を見出して、それを使って世の為人の為に成る事を実行し、自らの喜びとすることにある。

それは、古人の教えの些細な日常所作から始まる。

